

報徳博物館

友の会 だより
No.4

小笠原 清氏 空撮 1986.10.3

尊徳生誕二百年を迎えて

ことし昭和62年（1987）は、郷土の偉人二宮尊徳が天明7年（1787）に生まれてから、ちょうど200年にあたります。旧暦7月23日の誕生日を太陽暦に換算すると9月4日になりますので、この月をめざしてメイン・イベントを組むほか、年間を通じてさまざまな行事や記念事業が準備されています。年明けとともに、報徳二宮神社や報徳博物館の入り口には「奉祝・生誕二百年」の標示が出され、新聞・雑誌・テレビなどでも続々と採り上

げられて、ムードが高まって来たのはうれしいことです。

上の航空写真は、記念行事・事業の一つの拠点となる城址一帯の現況を、記念映画の撮影班がとったものです。お城もお堀も尊徳の逸話や教訓を伝えていますし、神社と博物館の間の道路は、青年時代の尊徳が家老服部十郎兵衛の屋敷（この写真のすぐ左方）に住み込んでいたころ足繁く通行した、まさにその道であるわけです。

映画口ケ地紹介

二宮尊徳生誕200年記念映画の取材報告は、継続して掲載する予定でいます。今回は、特に北海道方面の口ケ地を紹介し、現在の生きている報徳運動にも注目したいと思います。



〔野付〕 北海道の東端オホーツク海野付水道をへだてて目前に国後島を望む漁村の通称で、日本で最も広い町、四国香川県よりも広い別海町の北端に位置する。戦後自給自足の生活から供給漁業



へ急転換し、豊饒の海は数年にして資源枯渇。これを転換に計画的なサイクル漁業と根底に報徳仕法をすえた漁民の共済福祉制度

を実施し、今日サロベツと並び経済基盤の最も充実した北海道を代表する漁協に成長した。昨年8月全道報徳集会は野付漁業組合のホールで開かれた。



〔豊頃〕 北海道中川郡豊頃町。十勝川下流沿岸の町。十勝支流牛首別川の極めて穏やかな谷間に、明治30年二宮尊徳の孫尊親が福島県旧相馬藩出身有志を率いて入植し、開拓した二宮農場が展開する。当時の運営基盤興復社は今牛首別報徳会に変わり、豊頃町農業協同組合の一翼をになっている。挫折なき開拓地として北海道開拓史に誇るべき足跡を残してきた。



〔士幌〕 十勝平野の中枢都市帯広市の北方約30キロ、河東郡士幌町。日本で最も豊かな農協として近年一躍マスコミの脚光をあびたのが士幌農業協同組合。約30年前には下から数えた方が早い位の貧しい農協が、農民自身の澱粉工場取得を契機



に巨大な農業コンビナート経営と農業の機械化に成功し、今日なお地域社会の文化と新しい

経済基盤づくりに寄与している。代々の指導者が報徳の理念をその組織づくりと運営の基礎にすえてきたことは、関係者のよく知るところである。

〔野幌〕 札幌の北郊に接する江別市西南部。明治23年この地に新潟県第一回選出衆議院議員岡矢孫左衛門が、期するところがあって議員の地位を放棄し、郷土の移民団を引率して野幌に入植した。翌々年周辺の原生林を農地涵養林として保存に尽力、さらに明治38年に原生林内の農業用水地の共有地確保の問題をめぐって、開拓者の結束と共有財産運営積極化の必要を生じ、同44年に至って野幌報徳社を結成した。2050ヘクタールの広大な原生林は現在野幌森林公園となり、開発の進んだ札幌地域に貴重な自然環境を提供している。

【札幌】 尊徳翁最晩年の門人、小田原市大友出身の大友亀太郎が、慶応2年（1866）幕吏として札幌に初めて組織的な開発を実施した。最近その事績が評価されて、彼の開削した札幌都市計画の原点にあたる大友堀、現創成川のほとりに、若き



日の亀太郎の姿を形どったりりしい銅像が建てられた。また、御手作場（模範農場）と称する札幌元

村開拓地の指導事務所・大友役所は現在の東区にあり、その跡地には札幌村郷土記念館が設置され、



大友亀太郎の業績の紹介をはじめ札幌草創期の生活を物語る郷土資料を展示している。

なお現在札幌には農漁業の協同組合と堅く結ばれて発展してきた北海道報徳社があり、今日最も実践力に富んでいるといわれる北海道報徳活動の指導的役割を果たしている。

7 子供のときから大きかったか？

— ある伝記漫画の本に、金治郎は子供のとき、ほかの子よりずっと体が大きかった、とありますが、本当でしょうか？ —

そういう証拠はありません。逆に、小さくて困ったという証拠ならあります。

金治郎の12歳のとき、お父さんが病気で働けなくなりました。金治郎は代りに農作業に出ますが、背がまだ低いものですから、桶をかついであぜ道を通ろうとしても、両側の稲やら麦やら大豆やらに桶が引っかかって、先へ進めません。それで、早く人並みの背丈にして下さいと、天地神仏に祈りました。ほかに祈ることとてありませんでした。

また、あるときは、米俵を結わえようとしても、1人前の力がないので結わえることができません。お田さんと2人で、「セーノ」と気をそろえてやってみたもの、おとなの力と子供の力とそろわないので、俵が締まりません。悲しくて、早く人並みの体になりたいなあ、と、天を仰いで嘆きました。

これは尊徳が娘の文子に物語った話で、『報徳秘稿』に出ています。こういう資料があるのに、尊徳が182センチ・94キロの巨人だったから子供のときも大きかったろうと、想像で書く人があったら、困りものですね。

8 金治郎は薪を背負ったか？

— 薪を背負って本を読みながら歩く、あの有名な少年像が、実は本当の姿ではないという話をちょっと聞きましたが。 —

あれは彫刻家が『報徳記』の記事などに基づいて作り上げたイメージが、固定してしまったものですね。その『報徳記』には、「薪とりの行き帰りにも『大学』の本を懐ろにして、道々歩きながらこれを誦した。大声でやるものだから、人々からキ印などといわれた。」とありまして、少なくとも、本にかじりつくような読みかたではなかったのです。

それから、尊徳曾孫の二宮四郎先生の話によりますと、栢山の辺では、山から薪を運ぶのに、ああいう「背負子」は使わなかった。

「トンガリ」という天秤棒のような棒の両端に薪の束を刺して運んだということです。現に、昔の修身課用の掛け図には、金治郎がそのトンガリの薪の荷を道端におろして、ちょっと休んで本を広げたところが描いてあります。

そのほか、米をつきながら読んだ。農作業の合い間に読んだ。弁当を水でつかって、湯を沸かす時間だけ読んだ。あるいは、人が寝静まつてからそつと読んだ、とありますが、どれも彫刻にはなりにくいようで、結局あのワン・パターンが最近まで続いてきたわけですね。

二宮尊徳
Q & A

トピックス

—映画撮影の旅から—

座視しがたい桜町陣屋の傷み

この取材旅行は報徳関係の遺跡と資料とそして報徳とともに生きる人々との出会いの旅である。また事前の調査や打合せでは知ることができなかったさまざまな事象にもめぐりあうこともできた。その意味では新鮮な驚きに満ちていたともいえるのである。しかし時には心痛めずにはいられない事態に対面することもあった。そのひとつが栃木県二宮町にある国指定史跡桜町陣屋の傷みと風化の問題である。

桜町陣屋は二宮尊徳翁の業績を不動のものにした御仕法成功の検舞台であることは周知のことである。その陣屋の母屋と囲郭土塁の一部が、先人達の努力によって今日まで

残されてきたことは幸いであつた。ところがこの度の取材で私は十年ぶりに陣屋を訪れその傷みの進行の早さに少なからず驚かされた。周囲の整備状態もまた国史跡にふさわしい手入れがなされている、とは言い難い状態であつた。

歴史の舞台を訪れる時、訪問者は当然ながらそこにくりひろげられた人間ドラマを、それもでき



桜町陣屋は国の史跡であり、国民共有の財産である。その管理責任とそこに生じる受益の主体は地元の公共団体にある。しかし法にもり込まれた文化財活用精神がこの桜町陣屋において、行政的に生かされているように見うけられないのは残念なことである。

この陣屋はひとり二宮尊徳翁の遺跡に止まらず、幕府をはじめとする地方役所の代表的な姿を今に伝える、数少ない貴重な近世遺跡でもある。そのような観点も含め、この陣屋は確かな史料が残された尊徳翁活躍の時代の姿を復元し、史跡公園として充実した整備を施す価値は充分にあるはずである。あるいは報徳役所に働く人々の等身大の人形を配置することによって、当時の陣屋の活況を再現してみることも、見学者の興味をそそるにちがいない。また陣屋の環境を損なわない位置に資料展示館を設け、公開、管理、研究の態勢を整えることも考慮されてよいように思う。

いずれにせよ、当面はこの陣屋の傷みを防ぎ、環境を整備することが急務であることは、疑う余地のない事実であろう。聞くところによれば、栃木県では地方公共団体の要請があれば建造物補修費補助の用意があるという。国史跡であるからには当然国の大巾な補助はうけられるはずである。そして地元公共団体の自覚を促し、地元の心ある人々を勇気づけ、整備実現への機会を期待したい。

昭和62年度 友の会会員募集

報徳博物館を身近なものとして気軽に利用しよう。報徳のことをはじめ、歴史や文化をグループで学ぼう。楽しいサークル活動をしよう。そしてこの館を盛り立ててやろう……。

そういった方々に会員になっていただこうという趣旨です。会員になりますと、①博物館招待券の贈呈（1年間有効）②会報・パンフレット等の贈呈 ③研修室・講堂・閲覧室等の特別利用 ④館主催行事の案内 ⑤古文書等の受託管理、館売店の割引き利用、などの特典があります。

会費は個人会員年間3,000円・法人会員10,000円で、受付事務は博物館で行います。財団法人報徳福運社（郵便振替口座・横浜3-49044）に入会申込みの会費振込みをされますと、会員登録の上、会員証をお届けすることになっています。

発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250 小田原市南町1-5-72
電話0465(23)1151・振替磁気3-49044